

「配慮を必要とする子どもや家庭への支援に向けて」

～母に寄り添うために～

千葉県大網白里市 大竹保育園

発表者名 主任：清宮 弥生

小林 友香

《保育園概要》

定員 63名（平成29年2月現在：73名） **職員数** 28名 **設立年月日** 平成16年4月1日

設置市区町村概要：人口50192人 保育所数3カ所（公） 3カ所（私）

保育目標 1,健康な体をつくる。 2,愛情豊かな人間性を育む。 3,知的創造力を培う。

特色 ◎異年齢交流…製作やゲームをしたり、異年齢児のグループでの競争。

小さい子への接し方も自然と分かるようになり、思いやりの気持ちを育む。

◎**体育指導**…体育専門の講師が週に1回指導に来る。遊びの中から、体を動かす楽しさを味わい、年齢にあった運動機能の向上をはかっている。

◎**食育活動**…園庭にあるプランターで季節の野菜を栽培。又、近隣の方の畑を一部借り、さつまいもを育てている。種まき、苗植え、水やりなど、楽しかったり大変だったり作物の生長を肌で感じる事ができる。

《設定理由》

近年、保育園では気になる子や配慮を必要とする子が多くなってきていると感じる。落ち着きがない・言葉がなかなか出ない・友達や保育士とコミュニケーションをとることができないなど様々である。実際に『自閉スペクトラム症』と診断される子もいる。そのような子ども達の気持ちに寄り添って日々保育する中で、その子にとってどう関わるのが最善であるのか頭を抱えることもある。また、保護者とのかかわりについても、難しいと感じることがある。

そこで、大竹保育園では実際に『自閉スペクトラム症』と診断を受けた子どもと母親に対して『どう関わるのが最善か』『母の気持ちに寄り添うためにはどうしたら良いのか』など職員同士で話し合うことにした。

「相談しあえる場」「新たな支援の在り方を探る場」を作ることにより、子どもや保護者にとってよりよい支援方法が見つかるのではと考え、このテーマを設定した。

《研究内容》

- ① 年間個別計画を作成し、それに基づき、月ごとの月案作成。
- ② 職員会議を設け、月案に対する反省会を行うと共に職員間で情報を共有する。

- ③ 子どもの姿を見守り、よりよい関わり方やその子にあった支援方法を考える。
- ④ 母の気持ちを受け止め、子どもの様子を伝え合いながら、悩みや喜びに共感していく。
- ⑤ 母とのやりとりや、母の気持ちの変化を記録し、新たな支援の在り方を考える。

《1年を通してのK君の様子・変化》

- I 期**・環境の変化からか4月当初から自慰行為が激しく、床に寝ころび腰を動かしたり、時には下着を下ろして性器をいじるなどの行動が目立った。そうした行動を見かけた時は、禁止するのではなく、自然に他の遊びに移れるように全職員で働きかけていたが、家庭では放置していたという。
 - ・言葉で意思表示することができないので泣くことで伝えるしかない。
今後は言葉の問題が一番の課題となる。
 - ・友達には興味があり、寄って来てくれることを喜んでいる。
 - ・激しい偏食で白いもの（白飯・うどん・豆腐）・汁物以外はなかなか食べない。
(自閉症児の特徴にあてはまる)
 - ・週2日療育センターに通う。

- II 期**・自慰行為は減ってきた。
 - ・尿意を感じた時には股に手をやり知らせ、保育者の手を引いてトイレに行くようになった。
 - ・歯磨きも激しく嫌がっていたが、自ら歯ブラシを持つ姿も見られるようになった。
 - ・8月26日引っ越す。(離婚の為)
 - ・保育者と1対1で過ごせる静かな時間を1日の中で、30分でも確保したところ心の安定が見られ、自ら誘ってくるようになった。
 - ・9月に入り、給食用の配膳台の片付けをする仕事を習慣にすると、とても喜んで行う。友達が手を出すと怒る姿も見られた。お手伝いを通して、達成感や満足感が味わえたのではないかと思う。
(自己肯定力を高めることに繋がる)
 - ・8月より療育センターへ週3日通う。

- III 期**・10月3日より母が新しい仕事を始めた(介護職)。同時に甘えが強くなり、うがいや手洗いなど今までスムーズに出来ていたことをひっくり返って嫌がるが増えてきた。味噌汁や麦茶をわざとこぼすといったこともあった。排泄の失敗も増えた。
 - ・友達に対しての関心が出てきたのか、自ら寄って行き膝の上に座る姿も見られた。
 - ・母の希望で12月より毎日療育センターに通うようになる。(行事以外)園で過ごす時間は、療育センターから帰って来ての給食・午睡・おやつ・自由遊びに限られてきた。

- IV 期**・室内あそびではブロックをひたすら並べたり、マットを敷く向きにこだわる。戸外あそびではマン

ホールの蓋に執着し踏んだり水をかけたりする。自閉症児特有の『こだわり』が強く見られている。

- ・1年を通して、大きく成長・変化している様子が見られないのが現状である。
- ・身体的にも、4月から身長が4cm伸びたものの、体重は0.45kgしか増えていない。

《1年を通しての母の様子・変化》

- I 期**・H28・2月に自閉症と診断を受ける。しばらくは認めたくないという気持ちが強く、詳細な診断結果も見ようとしなかった。
- ・療育センターの先生より、「発達障害」の本を借りてはみたが「よく、わからない。」と本音を話してくれる。また、事実を受け入れたくないのと同時に、どうしていいかわからないというのが本当のところだった。
 - ・病院で『自閉スペクトラム症』と診断はつけられたが、次になにをしたら良いのかという具体的な方向性を教えてもらえなかったことが、不安要素につながっていたように思う。そんな中、本児の激しい自慰行為を放置していたり、園や療育センターからの手紙などのチェックもしないという状態だった。できる限り、K君の出来ることや出来たことなどをこまめに伝えるようにしていった。
 - ・H28・3月～9月は資格取得（介護職）の為に学校へ通う。
- II 期**・療育に関するサービスその他について知らずにいたので療育手帳の存在を知らせると、すぐに行動に移す姿が見られた。手続きなどは、知っていてやらないのではなく、知らないから出来ないということが多い様子なので、園側がわかる所を順次知らせていくようにした。
- ・8月26日アパートに引っ越し　・9月15日学校卒業、資格取得
 - ・学校の実習なども入り、迎えの時間が遅くなることも増えたので「大変ですね」と声をかけるが「う～ん。そんなでもないけどね。」といったマイペースな感じだったが、衣服や療育センター用のバックなど忘れ物は相変わらず多い。しかし、自分のおしゃれにはとても気をつけている。
 - ・引越しをすることで子どもと同様、母自身も自立をしなければならないという意識が見られた。
- III 期**・仕事も始まり、疲れが見られる様子だった。ますます忘れ物が多くなった。
- ・運動会への参加にあたって「全然無理しなくていい」「赤ちゃんだと思っているから」とわざと明るく言っている様子だったが、当日、最後まで参加できるととても喜んでいた。
- IV 期**・言語療法や音楽療法などにも多少の興味はあるようで、再度こども病院を受診。ケアマネージャーさんと出会い、別の支援を勧められた。言葉や栄養の専門的支援も受けられる、マザーズホームに見学に行く事になった。
- ・今までの流れから見ても、専門的なスタッフが側で背中を”ポン!!”と押してくれることで前に進む事ができている様子が見られる。

《研修を通して》

- ・委託研究を受け、自閉症と診断を受けたばかりの母・子と向き合うことにより、保育者自身が『自閉症とは？』という疑問から学びをスタートするきっかけとなった。K君に対しての直接的支援、母に対する精神的支援+情報の提供などは、この1年にとどまらずこの先も様々な角度から、支援できるよう保育者も学び続けていきたいと思う。
 - ・年間計画・月案作成・毎月の反省や現状報告などを行い、さらに全スタッフに向けての園内研修をすることにより、共通理解ができたのではないかと感じた。特に母への支援に関しては、自分から話しかけたり、相談してくれるタイプではないので、担任・園長・主任が主に声掛けをしていった。その様子などを毎日の職員会議で報告する事によって、全職員の共通理解が更に得られたかもしれない。
- 改めて、保育士間の連携が大切なのだと感じた。

《保護者への支援》

- ・我が子が自閉症であるという事実を目の前にして、『認めたくない』『何をどうしたら良いかわからない』という保護者に対し、保育者は何が出来るのか？という事からスタートした。
- まずは、保育者自身が【自閉スペクトラム症】とはどんなものなのか知る事から始めた。保護者の不安な気持ちに寄り添いながら、日々の生活の中でK君が出来たこと、出来るようになったことなどをこまめに伝えることで、信頼関係を深めていった。そうした日々の中で、専門的な支援がより必要であることも伝えていくと、いくつかの支援・専門機関に通うようになった。これは、診断を受ける前とはあきらかに変化として見られたことである。又、何気ない会話ややりとりから、信頼関係を築き、保護者が話したい時に話せる環境・雰囲気作りが大切だと感じた。シングルマザーとして4人の息子達の育児をしながら、働く母への尊敬の気持ちを伝えつつ寄り添いながら、不安な気持ちを受けとめ支援していく事とした。
- K君の成長を共に喜び、母の変化を見逃さず、『一緒に頑張ろう!!』という気持ちで関わった。

《今後の課題》

- ・少しずつではあるが、前へ進もうとする母の意欲が見られるようになってきているので、出来る限り途中で途切れないように、こまめに声を掛ける。又、今後の予定を具体的に聞き出すなど、きめ細かい配慮を引き続き行って行く。
- ・H29・4月よりK君が年中に進級するにあたり、就学の事も視野に入れながら行政サービス等の情報も提供していきたい。
- ・K君の成長は大きなものは見られず、逆に赤ちゃん返りをする面も多く見られた。母の生活環境が大きく変化した1年だったので、それも要因かもしれない。(離婚・通学・就職・引越し)
- ・4月からは、また園の生活も大きく変化するので、ゆるやかな成長を見守りつつ寄り添っていきたい。
- ・担任・担当だけではなく、子どもと関わる全ての職員が、子どもの様子や援助を共有していけるようにしたい。

障害があろうと無かろうとすべての子どもたちの成長に寄り添い、保育者自身も学び続けていきたい。